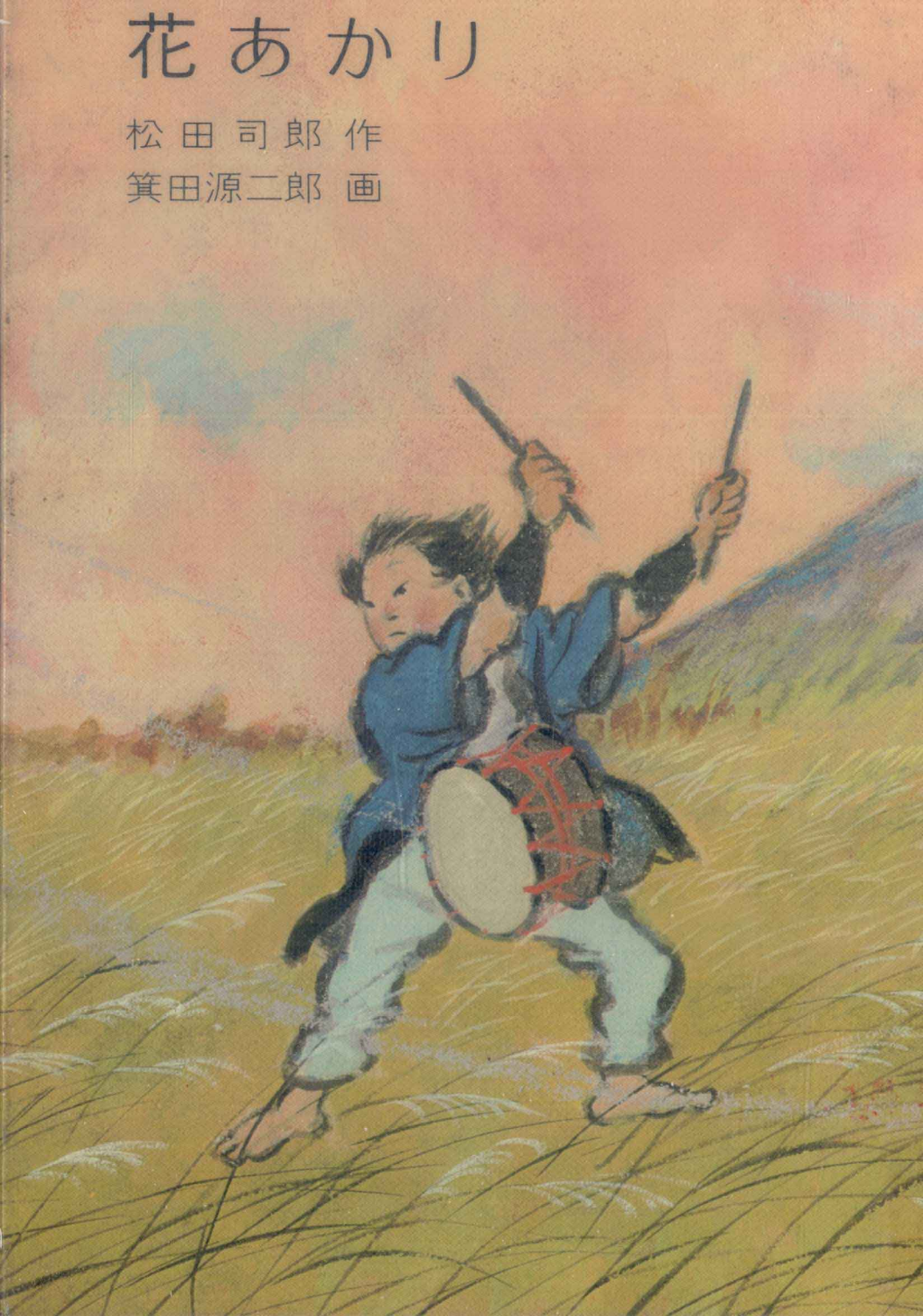
花あかり

松田司郎 作
箕田源二郎 画



913

花あかり

松田司郎 作　箕田源二郎 画

東京　小学館　昭和55 (1980)

142P　22cm

(小学館の創作児童文学シリーズ 19)

花あかり

一九八〇年十二月三十日　初版第一刷発行　定価・七八〇円

著者・松田司郎
画家・箕田源二郎
発行者・相賀徹夫
発行所・株式会社　小学館（〒一〇一）
東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一
電話・東京〇三(二三〇)五五四〇(編集)
五三三三(製作)五七三九(販売)
振替・東京八―二〇〇
印刷所・図書印刷株式会社

＊製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。

＊本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めてください。

© 1980 SHOGAKUKAN Printed in Japan

花あかり

松田司郎作
箕田源二郎画

装幀デザイン　中野博之

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

松田司郎（まつだ　しろう）
一九四二年、大阪に生まれる。生まれてすぐ、島根県の山村に移り、そこで幼年時代を過ごす。同志社大学英文科在学中は、外国の文学にとりつかれていたが、宮沢賢治によって児童文学の目を開かれ、創作を志す。島根の山村での記憶がその下敷きにあったかもしれない。児童文学者協会会員。主な作品に「ウネのてんぐ笑い」「マダラの鬼六」「おゆん」など。
現住所／大阪府富田林市
伏見堂五四八―一四九

箕田源二郎（みた　げんじろう）
一九一八年、東京に生まれる。青山師範卒業後、十二年間、小学校の先生をする。そのあいだ、美術文化協会などに属して制作をつづける。現在、童画グループ「車」同人として絵本やさし絵などにも活躍。主な作品としては、「ごんぎつね」「火」「鼻かけじぞうさん」など。
現住所／東京都町田市金井町二〇二九―九

花あかり

風の祭り

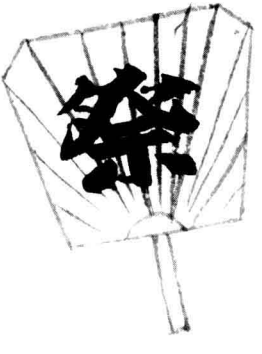
第一章

1

「風じゃ、風じゃ。風の祭りじゃーい」

伝次はかけた。すすきの穂のゆれる、りんどう平のひろい野っ原をとぶようにかけた。お祭り伝次とそめぬかれた半てんが風にはためき、ぐいとさしあげた大うちわが、風を押しもどそうとしてくるくるまわった。

伝次が手にさげていたのは、破れうちわだけではない。生まれてまもない小伝太をこわ



きにかかえこむようにしていたのだが、赤子は風鳴りに負けないくらいの大声で泣いていた。

「おう、おう、いいぞ。もっと泣け、もっと泣け。風の祭りは、いせいがよくなくちゃいけねえじゃ」

伝次は、かぶせていたぼろが風にもっていかれたのもかまわず、万年雪に白く輝く恵那岐山めがけて、かけづめにかけた。

お祭り伝次のことなら、近在の村々で知らぬ者はいない。伝次はめしより祭りが好きだ。

田植えのさんばい祭りや山びらきの祭り、盆の踊りや取り入れ祭りに雨乞いの祭り――祭りと名のつくものがあれば、十日もまえからそわそわした。半てんや股引きを自分でごしごし洗い、のりをつけ、少しでもしわが残ると、はじめからやりなおした。ふだんはごろごろ寝っころがっているのに、まき割り、水くみ、ふきそうじと、やらないでもいいへまをやって、およねやばあやんにしかられた。

祭りの日がくると、暗いうちから起きだして、冷たい川水をざぶざぶかぶって身を清め、およねのさしだす弁当をひったくるようにして出ていった。

伝次は祭り見物にいくのではない。祭りを取りしきりにいくのだ。伝次ほど祭りのことにくわしい者はいなかったから、伝次のいる佐用村はもちろん、近在の村々ではなんでも伝次に相談した。ごろ寝の伝次だが、祭りのことになると、人が変わったようにくるくると動きまわり、てきぱきとさしずした。

伝次は、山車や御輿のある祭りなら、いちばん大きな屋根の上に陣どった。足をぐいとひらいて、腰で拍子をとりながら、伝次が祭り歌をうたいだすと、行列はいっぺんにしゃんとした。踊り手もはやし方も取り巻きも、うきうきしてきて、じっとしていることができなくなった。知らないあいだに口がひらき、手足が動きだした。

伝次は、どんなにゆれる屋根の上でも、鳥のように軽々と踊ることができたが、秋祭りのとき、山車と山車がぶつかりあって転倒したはずみで、屋根の上から落ちた。

頭を少し打っただけで、けがはなかったが、それから伝次はおかしくなった。

祭りがあれば、どんな遠くへでも出かけていってきぱきと取りしきり、よい声でうたうのはいままでどおりとして、それからは祭りがないときでも、毎日のように出かけるようになったのだ。

伝次がおよねのつくった弁当をもって、子どものようにはしゃいで出かけていったのは、

恵那岐山のふもとにはてしなくひろがるりんどう平だった。

ふしぎに思っておよねがたずねても、伝次はきょうは東のほうの祭りだとか北のほうの祭りだとか答えた。

日暮れのまえにはきちんと帰ってくるし、うきうきしているのを見るのはうれしかったから、およねはそれ以上は問いつめないで、伝次の好物のふかしいもだのこんにゃくなどのはいった弁当をつくってやった。

りんどう平は、一年じゅう風が吹いていた。

風は、大きな風から小さな風、うなりをあげるものやらささやくようなやつ、空に浮かぶものやら地をすべるやつ、棒のような細長いしっぽをもったものから、三角にとがったやつと、いっぱいいた。とりわけ、風玉といわれる小さな玉のようなやつが、そこらじゅうにいっぱい浮かんでいた。

伝次は、風たちを引きつれて、のどいっぱいに祭り歌をうたった。伝次がいい声でうたいだすと、風はくるくるまわったり、とんぼがえりしたり、大きくふくれてのびあがったり、急降下したり……、押しあげ、なでつけ、まつわりついて、伝次といっしょになって踊った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

りんどう平を風が吹き荒れるのは、恵那岐山のふもとに風神たちの住む深い底なしの穴があるせいだといわれていた。

空がおだやかに晴れわたっているのに、風穴が鳴動すると、とつぜん雲がわきあがり、山を包む。山はうなりをあげてふるえだし、そのてっぺんからたたきつけるように烈風を落とす。風は山をかけおり、おりるにつれて勢いをます。りんどう平のひろい野っ原をさかまき、うねり、突きあげて走る。ときには、草木をなぎたおし、家屋をこわし、田畑をふみつぶす。稲穂におそいかかり、米つぶをもぎおとし、山のてっぺんまで吹きあげることもある。

台風がおそうわけでもないのに、秋になるとりんどう平には信じられないほどのはげしい風が舞うのだ。

「こら、伝次。小伝太はおまえの祭り道具じゃねえぞ。こんな風の日に野っ原なんどに出かけおって、風穴にでも引っぱりこまれたらどうするじゃ」

伝次が、泣きつかれて眠った小伝太を抱いてもどってくると、ばあやんがどなりつけた。ひったくるようにして受けとると、小伝太をぼろをかぶって寝ているおよねのところに連れていった。

小伝太は、およねのあったかい胸に抱かれると、目をさまして泣きだした。小さな頭をぐいぐい押して乳房にかじりついたが、いくら吸っても乳は出なかった。乳が出ないことは、腹をすかせた小伝太にとって悲しいことだったが、およねやばあやんにとっては、もっと悲しいことだった。

伝次が祭りうちわしかもてないのらくらものおかげで、田仕事はおよねとばあやんの二人でしなければならなかった。ばあやんは足腰が弱ってしまったので、力仕事はおよねにまかされた。

田畑といっても、お屋敷さまといわれる庄屋から借りていたから、順調に取り入れができても、殿さまにさし出す年貢やお屋敷さまへの払いをひけば、いくらも残らなかった。やりくりじょうずのおよねは、わずかばかりのくず米をいもやらあわと交換して、どうにか暮らしていた。ひでりや長雨や大風で作柄が不調の年には、村じゅうを走りまわってくめんしなければならなかった。

およねは、いまさら伝次に田仕事をおぼえてもらおうとは思わなかったが、小伝太をじょうぶに育てて少しでもはやく手助けできるようになってほしいと考えていた。だから、毎日の荒らくれ仕事で一人前の男のようにがっしりした自分のからだから乳が出ないとわ

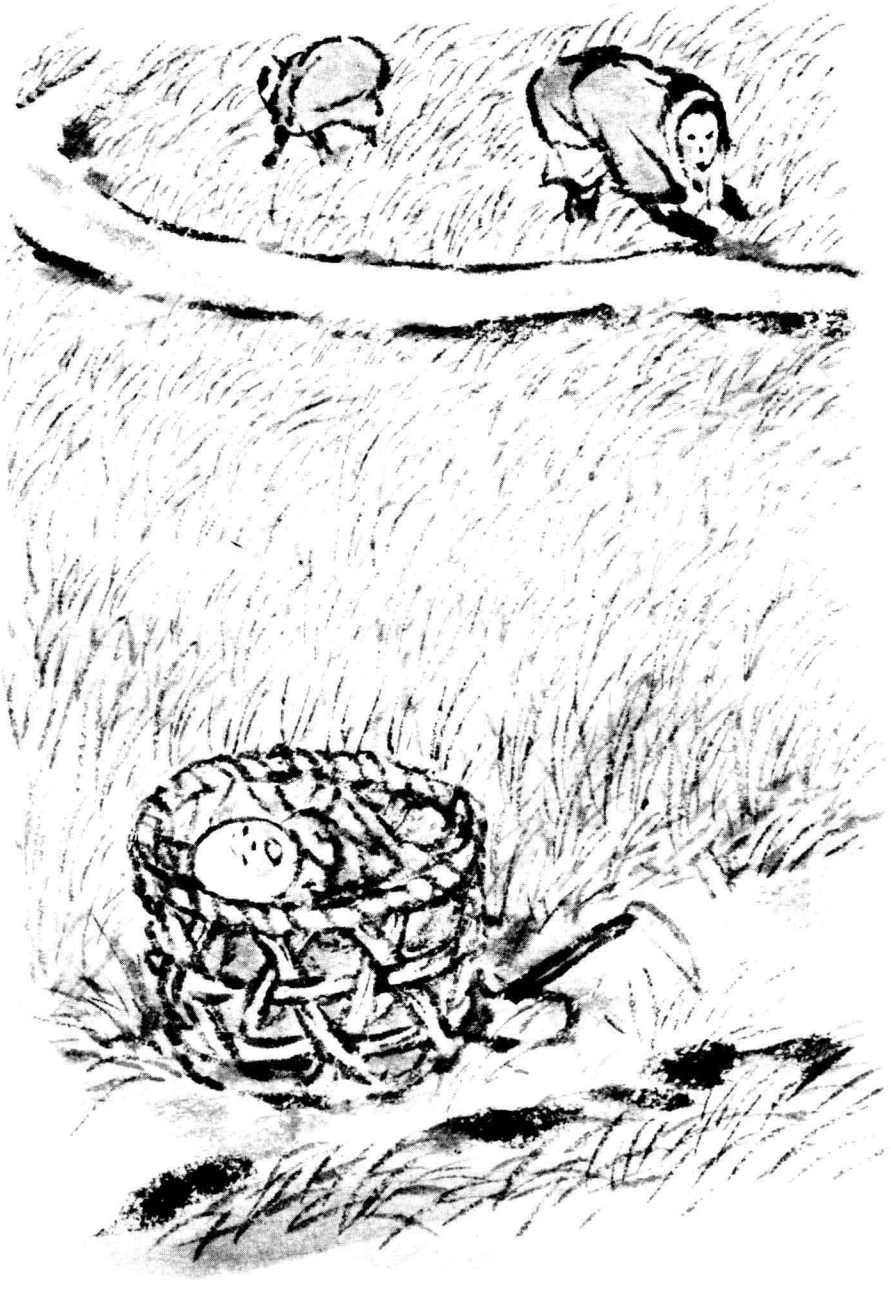
かったとき、くやしくてしかたがなかった。このうえ、小伝太にのませるしるがゆをしぼり出さねばならないとなると、夜も寝ないで手仕事をつづけねばならなかったからだ。

2

小伝太は、田の中で生まれ、田の中で育った。およねは小伝太を腹の中に入れたまま働きつづけ、田の中で生んだ。小伝太は、生まれるとすぐ、竹で編んだ草刈りかごに入れられて、あぜにおかれた。

小伝太は、ゆっくりとおよねに抱かれたことはなかった。およねはひょろ長い伝次にくらべて、肩も腰も大きくてがっしりしていたが、小さいとき、きゃきゃんでろくに食べなかったせいか、乳が出なかった。田仕事のあいまに抱くこともあったが、伝次の分まで働かねばならなかったから、小伝太はすぐにかごの中にもどされた。

家に帰っても、麻裏ぞうりの表を編む手仕事に精を出さねばならなかったから、小伝太を胸に抱きしめるのは、すっかり夜がふけてからだった。およねは、あったかくてふわふわした小伝太の小さな顔に、田の土にまみれたざらざらのほほを押しあてて、一日のうちではじめてしあわせな気持ちにひたろうとしたが、つかれきったからだは、横になったと



思ったら、もう死んだように眠っていた。

小伝太が田のあぜで、むずかって大声でわめくと、腰が曲がって一人前に働けなくなったばあやんが、骨休めがわりに抱きあげてくれた。

小伝太はばあやんに抱いてもらうのが好きだった。ばあやんの肩ごしに、青々とひろがる田や遠くの森や山並みが見えたからだ。ばあやんのふところは、汗と泥とすえた草汁のにおいがした。

ばあやんには、好きなものが三つあった。酒と歌と踊りだった。

食うものにさえ困る小作百姓の暮らしに、酒などのめる機会はめったになかったが、ばあやんは祭りや婚礼や葬式など、ふるまい酒が出るような大きな集まりには、どんな遠くへでも出かけていった。ひとしずくの酒にでもじょうずに酔っぱらって、頼まれもしないのに踊りをおどった。めでたい祭りに踊りはつきものだったし、踊りとなるとばあやんの手や足は、別々の生きもののように動きまわったから、ばあやんのまわりには踊りの輪ができあがった。

酒や踊りはそう毎日願えるものではなかったが、歌ならどこででもうたえたから、ばあやんはいつでもしわだらけの口を動かしていた。

ねーろでや　ねーろでや　ねんねこせ
　ねえねば　山から　もっこぁくる
やーい　やーい　やいやいやい

ばあやんの歌を聞いていると、小伝太はからだの底がぽかぽかあたたかくなってきた。いい気持ちになって、腹のすいたのも忘れて、いつのまにか眠ってしまった。

田仕事が忙しいとき、およねは月明かりで働いたから、小伝太は夜のあぜにおかれることが多かった。かごの中から見えるものといえば、しだいにのびあがってくる稲穂だけだったが、そのかわり小伝太はさまざまな音を耳にした。

虫の声、鳥の歌、小石のはじける音。土を打ち、起こし、くだく音。牛が土をふみしめ、すきを引っぱり苦しがって泣く声。水が流れ、くるくるまわり、あわをたて、勢いよく稲株を洗う音。風が波だち、ゆれ、吹きあげる音。雨が空を打ち、草木をぬらし、土に小さな穴をあける音。そして、そこここではじける草種のかすかな音。

とりわけ、小伝太は風の音が好きだった。

風がやってくると小伝太は、身をのりだし、小さな手をふってかごのふちをカタカタい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com